

論 文

ボール運動で教えたい内容  
——「パスボール」の実践分析から——

山 本 秀 人

日本福祉大学 子ども発達学部

The Teaching Contents of Ball Games  
—— The Practice Analysis of "The Passball" ——

Hideto YAMAMOTO

Faculty of Child Development, Nihon Fukushi University

Keywords：ボール運動，幼児期，認識，教科内容，教材

目 次

はじめに

- 1 ボール運動の教材分析と発達
  - (1) ボール運動のおもしろさ
  - (2) 幼児期の発達の特徴
- 2 T市N保育園の保育計画
- 3 T市N保育園におけるボール運動（「パスボール」）の実践
  - (1) 子どもたちの実態と保育士の思い
  - (2) 「的あて，つまらん」
  - (3) 2人のコンビネーションによるパスからのシュート
  - (4) 空間認識と数量認識
  - (5) ビデオの分析・話し合い・振り返り
  - (6) パスボール大会

おわりに

わからせたい・できるようにさせたい内容

はじめに

筆者は，幼児体育における子どもたちに教えたい内容（教科内容）とその教えたい内容に応じて選択すべき教材の関係について，保育園における実践の分析を通じ次のように述べた。

「筆者が描いた幼稚園や保育園での体育の取り組みにおいて子どもたちに身につけさせたい教科内容である，(1)自分自身について，できた・うまくなったという実感をもっている，(2)友だちの動きと自分の動き，友だち同士との動きの違いを見つけ教えあうことができる（技術の比較，技術認識，自己認識，他者認識），(3)友だちができるように，うまくなったことをみんなで喜びあえる（他者認識，集団認識，人権意識とヒューマニズム），(4)ルールの必要性や重要性について理解し，必要なルールづくりができる（社会認識，ルール認識），(5)みんなで決めたルールや約束事，順番が守れ，必要な準備や後かたづけができる（社会認識，集団認識），との関係でこの『ラグビーパスボール』の実践をみると，(4)(5)の教科内容が達成できたと判断できる。つまり，(4)(5)の教科内

容を達成するためにはボール運動という教材が適していたということが言える。もちろん、この実践において他の(1)(2)(3)の教科内容についても多少なりとも影響をもたらしたと言えるが、ボール運動という教材が持っている特質を考えるとこれらの教科内容を直接的に達成するには不向きな教材と言わざるを得ない。これらの教科内容を達成するのに適した教材の選択が求められ、そのための教材研究が必要となる<sup>1)</sup>。

つまり、「これから子どもたちと取り組もうとしている教材それぞれの技術的特質と技術指導の系統性（その教材でしか味わえないおもしろさとそのことを保障する子どもたちの認識発達に応じた指導方法）、さらにそれぞれの文化的・教育的価値についての分析・研究をおこない、それぞれの教材に取り組みせることによって何を教え・わからせることができそうかについて明らかにしていくことである。それらの検討によって、子どもたちに教えたい教科内容が鮮明になってくるであろう<sup>2)</sup>」。教材それぞれの技術的特質と技術指導の系統性、さらに教材の文化的・教育的価値によって教科内容が規定されるのであり、そのための教材研究の重要性について指摘した。

また、幼児体育における「わかる（認識）」と「できる（習熟）」の関係について、保育園における「マット運動」の実践の分析を通じ次のように述べた。

「この実践の分析を通じて、『できる』の背景には必ず『わかる』が存在しており、その『わかる』をひきだす子どもたちの認識発達に応じた幼児体育の指導方法、さらにそのための教材研究の重要性が明らかになった。幼児体育における『わかる』と『できる』の関係は、ただ単に練習をくりかえすことによって『できる』ことのみを追求するのではなく、『運動ができるようになるためのポイントがわかる』、さらに『できない（わからない）子どもの技術的（認識的）なつまづきがわかり教えあうことができ、みんなができるようになることの重要性がわかる』というように『わかる』には2つの側面があることを理解したうえで、それらのことを『わからせる』ための教材に応じた指導方法の検討が重要となる。『わかる』と『できる』を結びつけ、その過程を学習していける指導方法や指導技術（わからせるための教具や技術指導の系統性）によって、子どもたちは『わかる』と『できる』の関係を学習できるのである<sup>3)</sup>」。

いずれも「教材研究の重要性」について言及し、教材

研究によって子どもたちに教えたい内容（教科内容）がより具体的になると指摘した。

本稿では、2011年度にT市N保育園の5歳児クラスにおいて、教材研究を経て取り組まれたボール運動（「パスボール<sup>注1)</sup>」）の実践を分析することから、ボール運動のおもしろさがわかるために子どもたちにわからせたい・できるようにさせたい内容について明らかにしたい。

## 1 ボール運動の教材分析と発達

### (1) ボール運動のおもしろさ

それぞれの教材には、それぞれの教材でしか味わえないおもしろさが存在している。では、ボール運動のおもしろさは一体何なのであろうか。そのことを検討する前に、ボール運動にはどのような種類があるのかについてみてみたい。

ボール運動を分類すると、(1)野球型、(2)ネット型、(3)攻防入り乱れ型、に分けることができる。野球型というのは、攻撃と守備が明確に分離されているものである。ネット型は、バレーボールやテニスのようにネットを挟んで敵と味方が分離されているものである。さらに、攻防入り乱れ型というのは、バスケットボールやサッカーのように、攻撃側と守備側が同じ空間を共有してはいるが、攻撃と守備が瞬時に入れ替わりながら展開されるものである<sup>注2)</sup>。

本稿では、攻防入り乱れ型のボール運動に着目し、そのおもしろさについて検討してみたい。この攻防入り乱れ型をはじめ、ボール運動で子どもたちがもっともおもしろいと感じるのは、ボール運動の最終目標であるゴール（シュート）が決まったときではないだろうか。

ボール運動の目的・目標は、「一定のルールに定められた条件のなかで自チームが相手チームよりも多くの得点（ゴール）をあげること、となるだろう。そして、この競技の目的・目標をルールに定められた条件のなかで達成するための手段・方法として、技術・戦術が位置づけられ体系化されている<sup>4)</sup>」のである。つまり、ボール運動に必要な個別の技術が2人以上のグループ戦術（コンビネーション）や全体のチーム戦術（チームフォーメーション）のなかで発揮される必要があるが、それらが上達するためには空間（スペース）や時間（タイミング）をうまく生かすことができるようになることが重要となり、攻防入り乱れ型のボール運動では特に必要となる<sup>5)</sup>。

これまでのボール運動の指導をみると、子ども同士を対面させボールを投げたり受けたりするなどの、個人の技能を習熟させることが最初に取り組みさせる内容であると捉え、その練習のみを取り組みさせた後ゲームを展開していくというのが一般的な方法であった。しかしながら、そのような指導方法では、実際のゲームになった時にどのように動けばいいのかわからないというのが子どもたちの実感であり、対面して動かずにボールを投げたり受けたりという場面はゲーム中にほとんど出現しないのも事実である。

民間教育研究団体である学校体育研究同志会では、攻防入り乱れ型のボール運動におけるおもしろさを、ボール運動の目的・目標である「ゴール」、言い換えれば「シュートを決めること」と捉え、その基礎技術<sup>注3)</sup>を「2人のコンビネーションによるパスからのシュート」であるとしている<sup>6)</sup>。つまり、「『コンビネーションを含むシュート』の最小単位は『2人』であり、『2人のコンビネーションによるシュート』は技術指導(練習)のプロセスにおいて最初の段階から最後の段階まで質的に発展していくもので、しかもボール運動の本質的な面白さを味わうためには誰もが習得しなければならない技術<sup>7)</sup>」であると捉えたのである。

そして、技術指導の系統性については、個人のボール操作のうまさ、2人のコンビネーションの予測・判断が一致するようなコンビネーションの発展、パス・シュートそのものの個人戦術の高まりとコート上の空間において多様なポジション間でコンビネーションが使えるコンビネーションの多様性(バリエーション)、相手の対応力や状況に応じてコンビネーションを切り替えたり組み合わせたりできるコンビネーションの複雑性(適応可能性)と整理し、これらについては子どもたちの発達の状況に応じて取り組まれる必要があるとしている<sup>8)</sup>。さらに、前述した技術指導の系統性を踏まえたうえで、ボール運動のうまさの階層については図1のように示すことができるであろう。

以上のように、攻防入り乱れ型のボール運動のおもしろさ、基礎技術、さらに技術指導の系統性について述べてきたが、はたして5歳児の子どもたちにこのおもしろさをわからせることができるであろうか。そのことを検討するには、幼児期の発達的特徴を理解する必要がある。

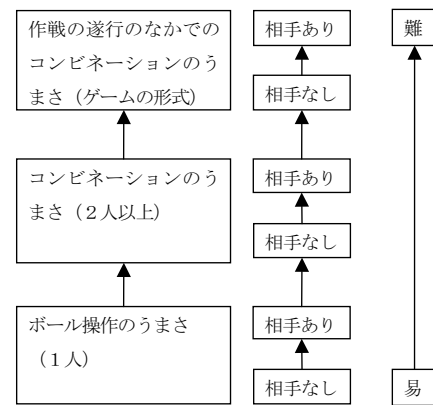


図1 ポール運動のうまさの階層の例<sup>9)</sup>

## (2) 幼児期の発達的特徴<sup>注4)</sup>

幼児期の発達的特徴を検討する前に、人間の運動にはどのような種類があるのかについてみてみたい。

人間の運動を分類すると、(1)生まれながらのもの、(2)発育に伴うもの、(3)運動学習するもの、(4)特別の練習を要するもの、に分けることができる<sup>10)</sup>。

生まれながらの運動とは、いわゆる反射であり、把握反射や吸啜反射である。例えば、吸啜反射が生まれながらにできなければ、母乳・ミルクを飲むことはできないのである。発育に伴う運動とは、生後5ヵ月ぐらいに表出するパラシュート反射などの姿勢反射である。運動学習する運動とは、立つ、歩く、走る、跳ぶなど人間だから自然に身につけているようにみえるが、実は人間社会において学習し身につけているものである。特別の練習を要する運動とは、一定の習熟練習をしないと身につかないと言われているものであり、スプーン、はし、鉛筆などの物を扱う運動がこれにあたる。本稿で取りあげるボール運動もまさにボールという物を扱う運動であり、練習しなければ決してうまくはならないのである。

これらの人間の運動の種類を踏まえ、さらに「幼児の体育指導について考えるとき、このような思考や認識の能力を無視して、あるいはそれを意識することなく指導してよいのかどうかということがあろう<sup>11)</sup>」という指摘も踏まえたうえで、まず認識の発達について理解しておく必要がある。

例えば、ジャンケンの「グー」、「チョキ」、「パー」という3つの関係は、自然にわかるようになるものではない。日々の生活やあそびのなかで能動的に人やモノという環境に対しかかわり、言語化していくなかでわかってくるものであり、本来4歳児でわかるようになるもので

ある。

しかしながらここ数年、いくつかの保育園で子どもたちを観察させてもらう際に感じるのは、確かに体つきは5歳児であるが、あそび方やことばのやり取り、コミュニケーションの取り方などをみると4歳児にみえてしまうということである。本来その年齢で育つべき「～したいけれど～」、「～しないといけない」、「こうありがたい」、「もしも～であるならば～である」などの認識部分の育ちそびれが原因ではないかと感じている。

我々人間には、生得的に認識という能力が備わっているわけではなく、家庭や幼稚園・保育園などの社会的・文化的・人間的な環境のなかで学習し、つまりはまた学習するということを繰り返し身につけていくのである。

「昨日（過去）」、「今日（現在）」、「明日（未来）」や「上下」、「左右」、「前後」などの時間・空間認識は、生活やあそびの様々な場面を通じ混乱しながらもわかっていくものであり、また順番が守れるようになり役割の分担が必要な「ごっこあそび」ができるようになっていくということは、他者とかかわるあそびを通じて対人関係や役割関係などの社会認識を学んでいくことを意味している。その他の自己認識・他者認識・集団認識・ルール認識・技術認識などの認識の発達も、人やモノという環境に対し能動的にかかわっていくことが基本となるが、それらの認識をより理性的・科学的な認識へと発展させていくことが、保育・幼児教育の大きな課題であろう。

本来、「子どもの認識の発達は、学習の過程で根本的に重要な位置をしめている。感性的認識の段階から理性的認識の段階へすすむ過程は、すでに幼児期にある程度までみられる<sup>12)</sup>」と言われており、認識の発達との関連をみすえた保育実践であるかどうか重要な意味をもってくるであろう。そのような保育実践を展開するためにも、幼児期の発達の特徴を踏まえる必要がある。

3歳児の子どもたちは、とびおり運動をやりたがる。とびおり運動を何度も繰り返し行うことにより、「降下緩衝能」という能力が身につく時期であるためやりたがるのであるが、この能力を身につけることによって、走る際の片足にかかる衝撃を和らげることができるようになり、走り方が巧みになってくる。さらに、前の年齢ではうまくできなかった片足とび（ケンケン）もできるようになり、静止したボールを蹴るという動作も巧みになり、人間固有の親指と人さし指で物をつまむという動き

も形成されてくる。認識面では、ことばの持っている意味をより理解できるようになり、例えば「ゆっくり動いてごらん」、「フワッと跳んでごらん」というようなことばかけに対し、自分の動きを意識的にコントロールするようになってくる。さらには、「順番だから少し待ってね」ということばかけに対しても、やりたいけれども待つというように自分の気持ちもコントロールできるようになってくるのである。

4歳児になると、幼児期に現れるほとんどの基本動作を行えるようになる条件があると言われており、前後の年齢である3歳児や5歳児に比べ急激な運動発達をとげる条件をもっている年齢である。しかしながらその反面、個人差が大きくなる時期でもあり、このことは認識面の発達と深い関係がある。自分と他の子を比較し、「自分はあの子に比べ運動がうまい（できる）、あるいはへた（できない）」という違いや「勝ち・負け」も明確に理解しはじめ、「自分は運動が得意なんだ」と思いはじめた子どもは積極的に取り組むが、「自分はへたなんだ」と感じた子どもはその場を避けるという選択をしはじめてしまう。この年齢は、「運動ざらい・体育ざらい」をうみだす最初の年齢である。

5歳児になると、これまでおおざっぱな動きだったものが巧みさを増し、2つの動きをスムーズに結びつけることができるようになってくる。助走をつけて上手投げでボールを目標に向かって投げる、方向・強さ・タイミングを調整してボールを蹴るというように、動作間の協調・均衡や統一のある運動ができはじめる。認識面においては、自分と他の子との比較に加え、他の子同士の関係や動きの違いを客観的に理解しはじめ、お互いに適切なアドバイスをしあうことも可能となる。また、「小学校にいったらいっぱい勉強するんだ」というように、自分自身が変わっていく存在であると捉え、時間的な見通しのなかで今の自分を位置づける心の働きがうまれてくる。

以上のように、運動・認識・ことばの発達は深い関係性をもっていることがわかる。言うまでもなく、自然にそれらの発達がうまれてくるのではなく、人やモノという環境に対し能動的にかかわっていくことで可能となってくるのである。

## 2 T市N保育園の保育計画

T市N保育園は、愛知県の南部に位置している。公

表1 T市N保育園の教材とそのねらい

教材名	ねらい
マット運動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の身体の動きがわかり自分の意志で身体を動かすことができる</li> <li>・自分の身体を使い空間を表現する楽しさを味わう</li> <li>・自分の動きと友達の動きの違いがわかる</li> <li>・友達同士の動きの違いを見つけ教えあうことができる</li> <li>・自分達で準備, 片づけができる</li> </ul>
水あそび	<ul style="list-style-type: none"> <li>・呼吸の仕方がわかる</li> <li>・伏し浮きをして浮く感覚を知る</li> <li>・けのびをして脱力する感覚を知る</li> <li>・自分の身体の動きがわかり自分の意志で身体を動かすことができる</li> <li>・自分の動きと友達の動きの違いがわかる</li> <li>・友達同士の動きの違いを見つけ教えあうことができる</li> </ul>
ボール運動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・走りながらボールをパスしたりスピードやリズムをコントロールする力を養う</li> <li>・人やモノの動きを予測・判断して動く</li> <li>・自分達でルールを創り役割交代して楽しむ</li> <li>・決められたルールを守りながらあそぶ</li> <li>・自分達で作戦をたててあそびを展開する</li> <li>・チームで協力してゴールできるようにする</li> </ul>
鬼あそび	<ul style="list-style-type: none"> <li>・走りながら方向転換をしたりスピードやリズムをコントロールする力を養う</li> <li>・人やモノの動きを予測・判断して動く</li> <li>・自分達でルールを創り役割交代して楽しむ</li> <li>・決められたルールを守りながらあそぶ</li> <li>・自分達で作戦をたててあそびを展開する</li> </ul>

立保育園であったものを、1998年に設置主体をT市からT市社会福祉協議会に委託し公設民営の保育園としたうえで、それを機にデイサービスセンターを併設している。さらに、2005年度からは市の方針もあり完全民営化となっている。

2002年度から、「『運動あそびを通して、最後までやり遂げる力を育てるには』について、各年齢の子どもの発達過程を学び、知る。乳幼児期の運動発達と認識発達を学ぶ」(『平成15年度N保育園運営管理案』より)ことを保育園全体の研究課題として位置づけ、筆者と保育士との共同の取り組みとして体育指導を取り入れており、2011年度についても例年と同様の取り組みを実施している。

T市N保育園における2011年度5歳児の取り組む教材とそのねらいは、表1のとおりである。

### 3 T市N保育園におけるボール運動(「パスボール」)の実践

T市N保育園における2011年度のボール運動の取り組み内容を表2と表3に示した。この取り組み内容を作成するにあたっては、前述した「ボール運動の教材分析と発達」についての保育士による学習が背景に存在している。

表2はパスボールに向けて的あての取り組みであり、表3はパスボールそのものの取り組み内容である。

#### (1) 子どもたちの実態と保育士の思い

運動会も終わり、ボール運動に取り組もうと考え始めていた10月後半の子どもたちの実態について、保育士は次のように捉えていた。

「普段、自由あそびの時にボールあそびをやっているのはほとんどが男の子であるが、ボールを投げるという姿はあまりみられず、ボールを蹴るという動きが中心であった。ボールを投げさせてみると、片手投げができる子どもは全体(30人)の3分の1程度、3分の2の子どもは両手投げや下から投げるという状況。片手投げで遠くに投げようとするとう力が入ってしまい、目の前でバウンドしてしまう子どもも多くみられる。ボールをキャッチすることにも恐怖心があり、肘を伸ばしたまま目をつぶってキャッチしようとしている子どもがほとんどである」。取り扱っているボールは、5歳児の子どもでも片手でつかみやすく、柔らかいスポンジをコーティングしたものである。

以上のような子どもたちの実態を踏まえたうえで保育士は、走りながらボールをパスしたりスピードやリズムをコントロールする力を養う、人やモノの動きを予

表2 T市N保育園のパスボールに向けての的あての取り組み

月/日	ねらい	活動	保育士の援助
11/9	・多様なボール操作を行い、ボールの扱いに慣れる	(1人で) ・ボールを床についてからキャッチ ・ボールを上に向けて投げあげてからキャッチ ・ボールを上に向けて投げあげて手を叩いてからキャッチ ・ボールを上に向けて投げあげて回転してからキャッチ (2人で) ・バウンドさせて相手に投げる ・ボールを上に向けて投げあげてワンバウンドさせてからキャッチしたボールを相手に投げる ・相手に直接投げる ・投げられたボールをキャッチ	・手の平をボールに向けて指先でキャッチすることを知らせる ・ボールとの距離感覚を知らせる ・相手との距離をつかみ、相手がキャッチしやすいところに投げることを知らせる
11/17	・おもいきり投げる時と的をねらう時の投げ方との違いに気づく	(4グループに分かれ、いろいろな的あてを楽しむ) ・鬼をやっつける 鬼の絵の的をめがけ、鬼の顔・腕・足などねらいをつけてボールを投げる ・ペットボトル倒し 台の上に水を入れたペットボトルを置き、ボールを投げて落とす ・フラフープくぐり フラフープの中を通すようにボールを投げる ・ジャングルトンネル ジャングルジムの枠の中をねらってボールを投げる	・子どもたちを4つのグループに分け、すべての的を体験させる ・的あてを楽しんだあと、ひとつひとつの的あてについてどこが難しかったか、どの的が当たりやすかったか通しやすかったかなど子どもたちと話し合い、的によって投げ方を変えたり、投げる強さを変えたことに気づかせる
11/28	・ねらった的にボールを当てる	・円の中心に的を置き、円の外から投げる的あてゲーム(360度どこから投げても良い)。ボールは1人一つ	・ゲームが終わった後、子どもたちと話し合い、いろんなところ(360度)から投げることができるが、投げ方や投げる場所を工夫しないと当てにくいことを確認する
12/1	・仲間にパスをしたり、相手を避けたりしながらシュート(的にボールを当てる)をする	・二重円を描き、円の中心に的をおく。赤チーム・青チームに分かれ、攻めるチームは二重円の外からの的をねらう。守るチームは二重円の間に入り、シュートを阻止する。攻めるチームは4人、守るチームは3人。ボールは一つ	・攻めと守りのゲームになったことで、これまでの的に当てていた子どもが一度も的に当てることができず、またボールに一度も触れずにゲームが終わってしまう子どもがでてくる

表3 T市N保育園のパスボールの取り組み

月/日	活動	保育士の援助	子どもの姿
12/9	・的を取り入れたパスボールの試合(4人対4人ゲーム)	・「1人の子どもがシュートして決まったら、その子どもは同じチームの子ども全員がシュートして決まるまではシュートできない」というルールを保育士が提案(どの子どもにもシュートするチャンスをつくるため)	・自分がボールを持ちたい思いが強く、ボールを持っていない子どもは敵味方関係なく、ボールを持っている子どもを追いかけけている状態 ・自分がどこに動いたらいいかわからない子どもがほとんど
12/14	・「2人のコンビネーションによるパスからのシュート」の練習 (1)保育士にパスしてゴールに向かって走り、保育士がパスしたボールをキャッチしてシュート(2-0) (2)保育士の役割も子どもにさせる	・ホワイトボードに絵を描き、動き方を知らせる	・ボールのキャッチができない ・ホワイトボード上ではどこに動けばいいのかわかるが、実際の場面では自分がどこに動けばいいのかわからない子どもが多い
12/16	話し合い ・前回のゲーム(4人対4人)で困ったことを話し合う	・今後、三角形が意識できるように、またボールに触れる機会が多くなるように、3人対3人のゲームに変更することを子どもたちに伝える	・K児が、「誰がシュートしたらいいかわからず、パスも誰にしたらいいかわからなかった」と発言 ・R児が、「シュートが決まった子は、帽子を白にしてはどうか」と発言

12/19	・3人対3人のゲーム	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゲームの途中で子どもたちの動きを止め、ボールを持っていない子ども2人はどこに動いたらいいか問いかける</li> <li>・的の高さを低くし、的の向こう側が見えやすくする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゲーム終了後、4人対4人のゲームと3人対3人のゲームの違うところがあったかと子どもたちに問いかけると、K児が「3人対3人のほうがスッと動けた」と発言。さらに、N児が「初めてシュートできた」と発言</li> </ul>
1/12	<ul style="list-style-type: none"> <li>・三角形について考える</li> <li>・3人対3人のゲームの攻めと守りの練習</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ホワイトボードを使って図を描き、どこに自分が動けば三角形になるか、子どもたちと考える</li> <li>・三角形になるとどんなことができるか、子どもたちに伝える</li> <li>・練習中、的のまわりで三角形になったグループの動きを止め、白線を描いて結び、三角形になっていることを見せる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ボールに対し、手の平を下に向け肘をのばして捕ろうとし、キャッチできない</li> <li>・三角形を意識したグループが少なく、ボールを持った子どもを追いかけてしまう</li> </ul>
1/13	・ゲーム	<ul style="list-style-type: none"> <li>・5試合中の2つの場面を止め、キャッチの大切さを知らせる</li> <li>(1)Y児がT児にパスをして、そのボールをT児がしっかりキャッチして、すぐにシュートする場面</li> <li>(2)A児がE児にパスしたが、キャッチできず、敵にボールをとられてしまう場面</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・三角形を意識できるチームがでてくる</li> <li>・シュートが決まったら歩いて戻ったり、あるいは自分がシュートが決まったらあとは知らないという子どもが多い</li> </ul>
1/19	・ゲーム	<p>ビデオ撮影</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・三角形になった時、意味のあるパスをした時、シュートが決まった後の戻り方を撮影し、後日子どもたちと分析する</li> <li>・動き方がわからない子どもには、保育士が動き方を誘導し知らせていく</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3チームが、三角形をよく理解でき動け、自分がどこに動けばいいのかがわかってきた</li> <li>・しかし、まったくわからず、ただ動いているだけの子ども、どこに行けばいいのかわからず立ちまわりの子どももいた</li> </ul>
1/22	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前回のゲームのビデオを見て振り返り</li> <li>・ゲーム</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前回のゲームを撮影したビデオを見て解説し、振り返りをしてからゲームにはいる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ビデオを見たことでひとつひとつの動きを意識する子どもが増え、攻守の切り替えが速くなる</li> </ul>
2/13	<ul style="list-style-type: none"> <li>話し合い</li> <li>・チーム決め</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前回のゲーム結果(5ゲーム分)をホワイトボードに貼りだし、ひとつひとつのゲームの結果を子どもたちと分析する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・K児が5ゲームすべての結果を見て、「自分たちのゲーム(青チームの1ゲーム目)は5点シュート入っているのに、4ゲーム目が0点だから負けたのかな」と発言</li> </ul>
2/22	<ul style="list-style-type: none"> <li>・的の前で自分がボールを持った時、自分はシュートできるのか、それとも味方にパスをして先にシュートさせたほうがいいのかを意識して、3人対3人の攻めと守りの練習</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ホワイトボードを使って図を描き、三角形についてもう一度子どもたちと確認する</li> <li>・この日の練習を撮影し、後日子どもたちと分析する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・三角形になっているが、三角形が活用されていないチームが多い</li> <li>・なかには今は前に敵がいるから味方にパスをして先にシュートさせている子どももいる</li> </ul>
2/23	<ul style="list-style-type: none"> <li>話し合い</li> <li>・前回の練習のビデオを見る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育士主導でビデオの解説をせず、子どもたちが言語化して動きの説明ができるようにする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ビデオを見て、気づいたことを言語化し動き方の説明ができる子どもが増えてはきたが、どう説明していいかわからない子どももいる</li> </ul>
3/7	・ゲーム	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これまで取り組んできたことをひとつひとつ確認してからゲームにはいる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全体的に、攻め、守りともすばやくなる</li> </ul>
3/8	・ゲーム	<ul style="list-style-type: none"> <li>・三角形の意味とつくり方を再度説明してからゲームにはいる</li> <li>・青チーム対赤チームの5ゲームすべてのなかで今日一番良かったプレーを5ゲーム全部終わったあとで聞くのでよく見るようにと説明する(ゲームの振り返りとゲームの再現)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ボールを持って走りこんでシュートしようとしたJ児が、敵の3人が的を守っていたため一度引き返し、再度攻めようとした際、J児の動きに応じて味方のK児が的の後ろに、さらにA児が的の右横の空間に走りこみ、J児が的の後ろに走りこんだK児にパスを出しK児がしっかりキャッチしシュートを決める場面がでた</li> <li>・他のゲームでも動きながら三角形をつくり、効果的なパスからのシュートが決まる場面が見られた</li> <li>・5ゲーム終了後、「今日のゲームのなかで一番良かったプレーはどれだった」という保育士の問いかけに、J児・K児・A児3人のプレーを対戦相手の負けたチームのY児が具体的に3人の子どもの動きを再現しながら指摘すると、全員が賛同の拍手</li> </ul>
3/17	・バスボール大会		

測・判断して動く、自分達でルールを創り役割交代して楽しむ、決められたルールを守りながらあそび、自分達で作戦をたててあそびを展開する、チームで協力してゴールできるようにする、というねらいを掲げてボール運動に取り組みはじめる。

ボール運動という教材について保育士は、「ボールは投げる、蹴る、捕る、つくなど様々な遊びができる楽しい道具であり、もっと高く投げたい、もっと遠くへ投げたい、ねらったところに当てたいなど、自分の上達を楽しむことができるものであり、さらに仲間と関わる楽しさもある」と捉えている。しかし、「パスをしたり、ゲームをしたりなど、友達と活動することが楽しいあそびではあるが、経験によって力の差が生じるため、得意な子どもだけが活躍することが起こりやすい」とも捉えていた。そのため、「的を使ってのパスボールのゲームを展開していくにあたり、子どもたちのボール操作能力の差を埋める必要があること、さらに的にうまく当てるためには力いっぱい投げるのではなく、ある程度力をコントロールして投げる必要があるのではないか」とも考えていた。保育士は、まず力いっぱい投げる体験をさせてからの的をねらう活動(的あて)に展開したうえで、力いっぱい投げる時の投げ方と的をねらう時の投げ方の違いに気づかせてからパスボールのゲームにはいりたいと考えていた。

## (2) 「的あて、つまらん」

ボール操作能力を高めようと、まずは一人で床にボールをバウンドさせてからキャッチ、上に投げあげてからキャッチなど十分に遊んでボールに慣れたのち、二人一組になりボールをバウンドさせて相手に投げる・キャッチ、ノーバウンドで相手に投げる・キャッチという取り組みが始まった。いきなり、直接ノーバウンドで投げる・キャッチするのではなく、まずバウンドさせてからキャッチするという取り組みは、5歳児の空間認識の発達を踏まえたものである。バウンドしてくるボールをキャッチする場合と直接とんでくるボールをキャッチする場合の相違は、空間の大きさである。直接とんでくるボールをキャッチする際に視野に入る空間の大きさに比べ、バウンドしてから自分に向かってくるボールをキャッチする際に視野に入る空間は小さいため、自分に向かってくるボールを追視しやすくキャッチしやすいのである。

しかしながら子どもたちは、相手に向かって投げては

いるがまったく違うところに投げている子どももあり、さらにはほとんどの子どもがうまくキャッチできないのである。保育士は子どもたちを集め、相手のどこに投げたらボールをキャッチしやすいか、どのぐらいの力で投げたらいいのかと問いかけると、「胸のところ」、「ビュンビュン投げたらキャッチできない」という子どもたちの声である。わかってはいるが、実際にはできないのが現実のようである。

その後も同様の取り組みを展開するが、投げ方や相手のどこに投げたらキャッチしやすいかを意識している子どもが増えてはいるが、ボールをキャッチすることができない子どもがほとんどであった。次に、力いっぱい投げる時の投げ方と的をねらう時の投げ方の違いに気づかせるために、いろいろ的あて(鬼の的をねらって、ペットボトルをねらって、フラフープの中をねらって、ジャングルジムの枠をねらって)を楽しむことにした。

はじめは、力いっぱいおもいきり投げていた子どもたちであるが、何度やっても枠に入らないことが続くと考えはじめようになり、的によって投げるスピードを変えたり投げ方を工夫するようになってきた。終わった後の話し合いでは、「楽しかった」という子どもの声に対し保育士が「どこが楽しかった」と問いかけると、「的に当たった時」、「入った時」という反応があり、まさにボール運動のおもしろさであるゴール(シュート)そのものである。次に保育士が、「どの的が難しかった」と的の順番に聞いていくと、それぞれの的に対して手があがる。「じゃあ、的によって投げ方は変えたの」と保育士が聞くと、K児が「おもいきり投げたのは、鬼とペットボトルの時だし」という反応を示した。すかさず保育士が、「じゃあK児、フープやジャングルジムの時はどうやって投げた」と聞くと、「弱く」という返事がかえってきた。「すごい、的によって投げる強さ変えたんだね」と保育士がほめると、笑顔になったK児であった。他にも、「フワ〜と投げた」という反応をする子どもが数名であった。

最後に保育士から、今後は的あてのゲームをすること、このゲームは的に当たらないと点数が入らないし勝てないこと、今日のように投げ方を変えたり投げる強さを変えて的をねらうのも良い作戦だということ子どもたちに伝えて取り組みを終了した。

次に取り組んだのは、円を描き円の中心に的を置き、その的をねらって360度どこからでも当てることができ



的あてであるが、5人一組でボールは1人一つ持ち、1分間の間に何回的に当てられるかの競争である。記録は、次の5人が担当する。「よ～い、スタート」の保育士の合図で的に向かって投げはじめる子どもたちであるが、力を抜いて上からフワ～と投げる子、地面にワンバンドさせて投げる子、的に当てたあと自分に向かって戻ってくるボールをすぐに捕り的に当てる子など、投げ方を工夫している子どもが増えてきている。全員が終わった後、「どうだった」という保育士の問いかけに、「たくさん当たって楽しかった」、「いろんなところから投げられる」という子どもたちの声である。

次の的あてでは、二重円を描き円の中心に的をおき赤チーム・青チームに分かれ、一つのボールをめぐって攻めると守るを分離したものである。攻めるチームは二重円の外からの的をねらい、守るチームは二重円の間にはいりシュートを阻止する。攻めるチームは4人、守るチームは3人での取り組みである。味方にパスをしたり相手を避けてシュートすること、味方や敵の動きに応じて動くことが求められる的あてである。攻めと守りのゲームになったことで、これまでは的にボールを当てることができていた子どもが当てることができず、さらにボールに一度も触れずにゲームが終わってしまう子どもがでてきたのである。この的あての取り組み後の話し合いのなかで、次のような保育士と子どもたちとのやりとりがあった。

保育士の「この的あてゲームが一番おもしろいと思うところどこだと思う」に対して、「的にボールが当たった時」という子どもの声があがる。「じゃあ、これまでの的あてのゲームでシュートが的に当たっていない子やボールに触ることができていない子は」という問いに2人の子どもの手があがる。その2人の子どもに、「的あて、今楽しい」と聞くと「的あて、つまらん」と即答の子どもたちである。

「そうだね、シュートが当たらなかつたり、ボールに触れなかつたらつまらないよね。先生からみんなにルールの提案です。明日からやろうと思っている、的を二つだして攻めたり守ったりするパスボールというゲームがあるんだけど、チームのなかで一人の子がシュートを決めたらその子は他の味方の子が全員シュートを決めるまでシュートをしてはいけないというルールをつくります。でも、シュートを決めた子はそれで終わりじゃなく、他の味方の子をシュートさせるようにするんだよ」という

保育士の提案を受け入れる子どもたちである。さらに、「あとひとつ考えてほしいのは、ボールを持った時敵が来てシュートができない時どうする」という保育士の問いかけには、「パスする」という反応を示す子どもたちである。保育士のこのルールの提案は、子どもたち全員にボール運動のおもしろさである「ゴール(シュート)」を味あわせたいという思いからの提案ではあるが、攻防入り乱れ型のボール運動において重要となる「意味あるパス」をいかに子どもたちにわからせるかという課題でもある。

子どもたちが攻防入り乱れ型のボール運動がおもしろくなるために、子どもたちに何をわからせ・できるようにさせる必要があるのかについての検討が求められている段階である。

(3) 2人のコンビネーションによるパスからのシュートを2つ出し、相手の的にシュートする4人対4人のパスボールに取り組むが、ゲームがはじまると、とにかくボールを持ちたい思いが強く、ボールを持っていない子どもは敵味方関係なくボールを持っている子どもを追いかけ、それ以外の子どもは自分がどこに動いたらいいのかわからず、ただ立ちつくしている状態であった。このままでは、パスボールを楽しむどころではないと判断した保育士は、攻防入り乱れ型のボール運動の基礎技術である「2人のコンビネーションによるパスからのシュート」に取り組むこととした。今子どもたちに必要なのは、個人のボール操作のうまさや2人以上のグループ戦術(コンビネーション)や全体のチーム戦術(チームフォーメーション)のなかで発揮できるようにすることであり、それらが上達するためには空間(スペース)や時間(タイミング)をうまく生かすことができなければならないのである。

図2が「2人のコンビネーションによるパスからのシュート」である。流れとしては、ボールを持ったAが、Bにパスをしてからの的にに向かって走りだす、パスをもらったBは的にに向かって走ってくるAにパスを出す、BからのパスをキャッチしたAは的にに向かってシュート、である。この一連の流れにおいては、ボールを上手投げでパスすることと、パスされたボールをキャッチしてパスあるいはシュートという個人のボール操作に加え、Bに求められるのはAの走ってくるスピードと走りこんでくる空間を予測・判断したうえで、どのタイミングで

パスを出すのかということである。2人の予測・判断を一致させるコンビネーションであり、まさに空間（スペース）と時間（タイミング）をうまく生かすことが求められる。最終的には、このBの役割も子どもにさせたいのであるが、最初は保育士がこの役割を担う必要がある。このパスを出すタイミングが重要であり、的に向かって走ってくるAがBの位置を走りすぎてからBがAにパスを出すと、Aにとってみれば右斜め後方からボールがとんでくることになりボールをキャッチすることは難しくなるため（図3参照）、最初は走りこんでくるAがキャッチしやすい右斜め前方からパスを出す必要がある（図4参照）。右利きの場合は、右斜め前方からとんでくるボールはキャッチしやすく、キャッチのあとにすぐにシュートという一連の動きをスムーズにつなげやすいと言える。左利きの場合は、その反対である左斜め前方からパスを出してあげる必要があるため、Bの位置は逆サイドになる必要がある。それらの関係がわかる保育士がBの役割を最初にやったうえで、次にBの役割を子どもにやらせるという段階を踏んだほうが効果的である。

さらに、最初のAの位置とBの位置、そして走りこんでパスをもらうA'の位置を結ぶと三角形になる。この攻防入り乱れ型のボール運動において、この三角形をいかにつくりだすか、言い換えればこの三角形の関係を認識させることでボール運動のおもしろさを子どもたちにわからせることができるのではないだろうか。

この「2人のコンビネーションによるパスからのシュート」に取り組みはじめた子どもたちは、動きながらボールをキャッチすることができないようである。さらに、ホワイトボード上での「2人のコンビネーションによるパスからのシュート」の説明では、どこに動けばいいのかがわかるのであるが、実際に動きながらやってみるとどこに動けばいいのかわからない子どもが多いようである。しかしながら、何回か取り組んでいるうちに保育士からのパスを走りながらキャッチし、すぐに的にシュートできる子どもがではじめるようになってきた。

今後の取り組みとして、ゲームの前には必ず「2人のコンビネーションによるパスからのシュート」の練習をいれることとし、A・Bいずれの役割も全員の子どもができるようにしていく必要がある。

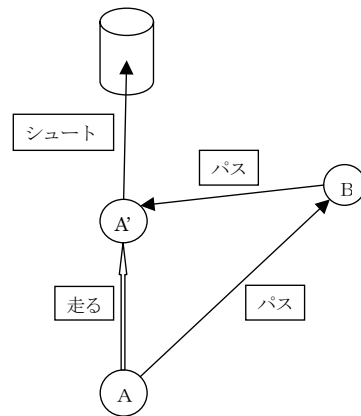


図2 2人のコンビネーションによるパスからのシュート

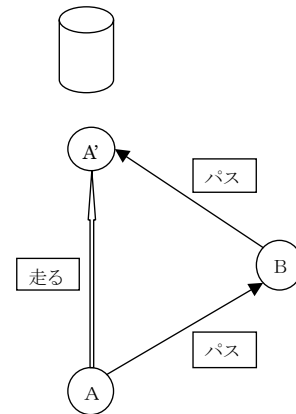


図3 A'のキャッチが難しい位置関係

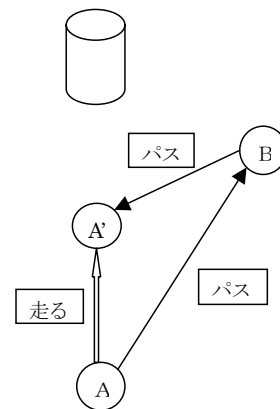


図4 A'のキャッチが易しい位置関係

(4) 空間認識と数量認識

前回行った4人対4人のパスボールのゲームについて、何か困ったことがあったかという話し合いを行った際、「誰がシュートを決めたか動いているうちにわからなくなり、パスを誰にすればいいのかわからない」というK児の言葉に、R児が「シュートが決まった子は帽子を

裏返して白にすればいい」と発言した。この発言からも、5歳児にとっての空間における数の認識をどのように捉えればいいのかについての検討が求められる。4人対4人でゲームを行う際には、自分以外に味方が3人と敵が4人の計7人を空間のなかで一度に認識する必要がでてくる。言い換えれば、今ボールは味方が持っているか敵が持っているかの違いに応じながら、空間のなかの味方や敵の位置関係を認識できれば自分はどうに動けばいいのかがわかってくるであろう。この点も踏まえ保育士は、今後三角形が意識できるように、またボールに触れる機会が多くなるように、3人対3人のパスボールに変更することを子どもたちに提案し、子どもたちも了承したのである。

図2に示した、Bの役割も子どもたちがやりはじめるようになった「2人のコンビネーションによるパスからのシュート」の練習をしてから、3人対3人のパスボールのゲームに取り組む子どもたちである。ゲームは、ジャンケンで勝ったチームのボールとなりコートの中真ん中からパスをしてスタート、シュートが決まったら決められたチームのボールになりコートの中真ん中からパスをしてリスタートというルールが加わった取り組みである。人数が変化したことにより、自分以外に味方が2人と敵が3人の計5人を一度に認識できて動けるかどうかであり、さらにパスをきっかけにゲームが進行するように変更されており、パスが必然となっている。

保育士は、パスボールのゲーム中に子どもたちの動きを止め、攻めているボールを持っている子どもの位置や動きに応じてボールを持っていない子ども2人はどこに動いたらいいのかについて、ゲームをやっている子どもに加え応援している子どもたちにも問いかける取り組みを展開している。すべてのゲームが終了後、保育士が4人対4人のゲームと3人対3人のゲームとの違いがあったかと子どもたちに問いかけると、「3人対3人のほうがスッと動けた、どこに動けばいいのが4人対4人の時よりわかった」というK児の声があがる。さらに、N児が「初めてシュートできた」とうれしそうな表情であった。なかには、図5のように的を中心に3人が三角形になって攻めているチームもではじめた（が攻めており、が守っている）。

年があけてからのゲーム前の「2人のコンビネーションによるパスからのシュート」では、守りの役割の子どもを1人加えての練習に変化させている（2-1の関係）。

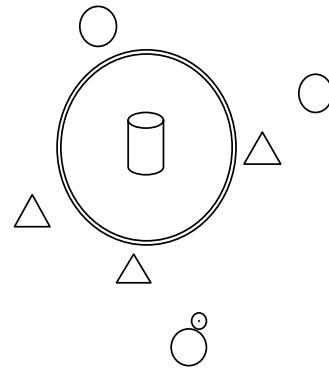


図5 三角形をつくり攻めている

守りが加わることにより、Aはどの空間にどのようなタイミングで走りこめばパスをもらえてシュートできるかという予測・判断が求められ、さらにパスを出すBも動かずにパスを出すのではなくAの動きに応じて動きながらどのタイミングでパスを出せばいいのかという予測・判断が求められることになる。2人の関係に限定された初歩的なものではあるが、パス・シュートそのものの個人戦術の高まりとコート上の空間において多様なポジション間でコンビネーションが使えるコンビネーションの多様性（バリエーション）と相手の対応力や状況に応じてコンビネーションを切り替えたり組み合わせたりできるコンビネーションの複雑性（適応可能性）の段階の取り組みである。さらに、1つの的で3人対3人で攻めるだけ、守るだけと役割を限定しての練習も取り入れ、的のまわりで三角形になったチームの動きを止め、3人の位置を白線で結び三角形になっていることに気づかせている。

その後のゲームにおいても保育士は、ゲームのなかでうまくシュートが決まった場面を再現し、三角形になることとパスされたボールをきちんとキャッチすることの重要性について子どもたちに知らせている。さらに、どこに動けばいいのかわからない子どもに対しても、ゲームを止め、この場面の場合どこに動けばいいのかについて考えさせている。

そのような取り組みを繰り返していくなかで、三角形をよく理解して動けるようになり、どのような時にパスをすればいいのかというパスの意味を理解できる子どもが増えはじめてきた。しかしながら、依然としてただ動いているだけの子どもやどこに動けばいいのかわからず立ったまま動けない子どもも少なからず存在しているのも事実である。

(5) ビデオの分析・話し合い・振り返り

意味のあるパス、ボールをうまくキャッチすることの大切さ、攻めと守りの切り替えの速さ、三角形になることの意味をよりわからせるために、保育士はこれまでのゲームを撮影したビデオのなかから適切な場面を抽出し、子どもたちに見せながら解説することにした。より視覚的に理解させようとしての取り組みである。

子どもたちに見せた場面は、K児・P児・S児3人のプレーである。

P児からS児にパスをした場面でビデオを止め、「この時K児がいないんだけどどこにいると思う」と保育士が問いかける。「ほんとだ、いない」と子ども(画面には映っていない)の声があがりビデオをスタートすると、「あっ、K児いた」と子どもたちの声があがる。ビデオを止め、「P児からS児にパスをした時、もうK児は攻める的のところにはいたんだよね」と保育士が解説を加える。ビデオをスタートさせ、S児がK児にパスした場面でビデオを止め、「この時、S児はK児のところに敵がいないのを見てパスしたね。これってとっても大切なパスだね」と保育士がさらに解説を加えるのである。ビデオをスタートさせると、S児からのパスをしっかりとキャッチしたK児がシュートして1点の場面が映しだされている。ビデオを止めて、「S児からのパスをしっかりとキャッチしたK児は、すぐにシュートできたね。ここで、もしボールをしっかりとキャッチできなかったら」という保育士の問いかけに、「シュートできない」と子どもたちの声があがるのである。また、「今のビデオ見てみんなどう思った」という保育士の問いかけに、「すごい」という声があがる。さらに、「どこがすごい」という問いかけには、「ちゃんと三角形になっていた」という子どもの声であった。「この3人は、攻める時も自分の的を守る時もとにかく走ってすぐに攻めたり守ったりしているの。これとっても大切。歩いている子なんていないの」という保育士の説明にうなずく子どもたちであった。

この場面のあとには、「パスが出せない時の動きの場面」、「パスをしたあとどこに動けばいいかわからない場面」、「ゲームに勝てないとわかり、途中でいいかげんなプレーになり意味がないパスを出した場面」を見せ、何がいけないのかについての保育士の説明を聞きながら食い入るようにビデオを見、素直にうなずく子どもたちであった。

ビデオを見ることで自分や他の子どもの動きを客観化できた子どもたちは、その後のゲームでは、ひとつひとつの動きを意識する子どもが増え、攻守の切り替えが速くなり、応援している子どもからは、「ちゃん、ゴールの右に動いて三角形になれ」などの指示がでるようになってきた。

最終的なパスボールの展開は、30人の子どもを赤チームと青チームの15人ずつに分け、それぞれのチームが3人一組を5組つくり、5ゲームを行い総得点によって勝ち負けを決めるということになった。

その後の取り組みは、「赤・青の2チームと3人一組を子どもたちに決めさせる」、「ゲームの結果を子どもたちと分析する」、「的の前で自分がボールを持った時、自分はシュートできるのか、それとも味方にパスをして先にシュートを決めさせた方がいいのかを意識させる」、「再度のビデオ分析」を展開してきた。

これまでの多様な取り組みから、子どもたちのなかに「今ボールは味方が持っている。どこに動くのが自分や味方にとって有利になり、ボールをもらえるか。さらに、今自分が持っているボールはパスすべきかシュートすべきか。あるいは、今ボールは敵が持っている。どこに動けば敵の攻撃を防げるか、ボールを奪い返せるか」などの予測・判断とそれに応じた動きがわかりはじめ、攻防入り乱れ型のボール運動であるパスボールが展開できるようになってきたようである。そのことを物語るのが、これまではどのように動けばいいのかがよくわからなかったJ児・K児・A児3人による次のプレーである。

ボールを持って走りこんでシュートしようとしたJ児が、敵の3人が的を守っていたため一度引き返し、再度攻めようとした際、J児の動きに応じて味方のK児が的の後ろに、さらにA児が的の右横の空間に走りこみ、J児が的の後ろに走りこんだK児にパスを出しK児がしっかりとキャッチしシュートを決めたのである。まさに、前述した図5のような三角形を3人がつくりだし、フリーになったK児にパスを出しシュートを決めたのである。そしてこのプレーによって、これまで長期間にわたり何度もゲームを行ってきたが、まだ「ゴール(シュート)」を決められていなかったK児がはじめて「ゴール(シュート)」を決めることができ、このことによって30人全員が「ゴール(シュート)」を決めたことになったのである。

それ以外のゲームにおいても、動きながら三角形をつ

くり、効果的なパスからシュートが決まる場面が数多くみられたのである。

さらに、5ゲーム終了後「今日のゲームのなかで一番良かったプレーはどれだった」という保育士の問いかけに、前述したJ児・K児・A児3人のプレーを対戦相手の負けたチームのY児が具体的に3人の子どもの動きを再現しながら指摘すると、全員が賛同の拍手を送ったのである。

#### (6) パスボール大会

卒園を控えた3月に入り、子どもたちの動きが変わってきたことを保育士は感じていた。

どの試合も守りが固くなり、なかなかシュートが決まらないゲームもありロングシュートを試みたり、守りを打ち破るために左右に細かいフェイントを入れて守りを動かしてから隙をついたシュートや、三角形の大きさを変えながら素早いパス交換をしてシュートを決めるなどの場面がでてきた。このような子どもたちの姿を保護者に見てもらいたいと思い、パスボール大会を行うことにしたのである。パスボール大会を行うことを子どもたちに伝えると、「よっしゃ」、「がんばる」という子どもたちの声があがるのである。「どんなところを見てもらいたい」という保育士の問いかけには、子どもたちから「楽しそうにやっているところ」、「シュートを決めたところ」、「パスができたところ」など多くの子どもたちの声があがるのである。「じゃあ、そのためにはどうしたらいいの」と聞くと、「三角形をつくる」、「ボールを持ったら自分がシュートするのか、それとも味方にパスした方がいいのかよく考えて動く」、「味方と敵とボールをよく見て動く」など、これまで取り組んできてわかったことをもう一度子どもたちと確認する保育士である。

パスボール大会までの子どもたちは、保育士がいなくても自分たちで、ラインなどを準備して練習する姿が見られた。さらに、ゲーム前の作戦タイムでは、3人のうち誰を先にシュートさせるのか、敵のチームにボールがいったらまだシュートを決めていない敵の子のそばについて、ボールが渡らないようにしようと確認しているチームもではじめたのである。

パスボール大会当日は、両親や祖父母に見てもらおうと、どの子もいい表情でやる気満々といった様子であった。ゲームの前に子どもたちとひとつひとつのルールとこれまで取り組んできたなかで大切なことを確認し、そ

の後保護者の方々にこれまで子どもたちと創りあげてきたパスボールについて説明してからゲームを開始したのである。どのゲームにおいてもどの子どもたちも、三角形をどのようにつくればいいのか、自分は状況に応じてどのように動けばいいのか（シュートなのかパスなのか、あいている空間にいかにか走りこめばいいのか）を考えながら展開されていた。

保育士はこのパスボールの実践について、パスボールはただボールを投げたりシュートを決めるといような技術を高めていく楽しさだけではなく、みんなでのつくったりゲームの記録をとったり、チームのメンバーを自分たちで決めたり、相手チームに勝つためにはどうしたらいいのか仲間と考えたり（作戦づくり）、みんなで創りあげていくことの楽しさを共有できる教材であると感じたと述べている。さらに、子どもたちに教えたい内容があり、その内容を達成するために教材を選択し、子どもたちの発達に応じ教材づくりをしていくためには、実践する前に取り組もうとしている教材の内容をいかに分析するかの重要性について痛感させられた半年であったとも述べている。

#### おわりに

##### わからせたい・できるようにさせたい内容

攻防入り乱れ型のボール運動のおもしろさがわかるために子どもたちにわからせたい・できるようにさせたい内容について明らかにしていくことを目的として、2011年度にT市N保育園の5歳児クラスにおいて取り組まれたパスボールの実践を分析してきた。

攻防入り乱れ型のボール運動のおもしろさである「ゴール（シュート）」を全員が決めることができ、卒園まじかに取り組まれたパスボール大会を楽しんだ子どもたちであるが、このようになるために子どもたちにわからせた・できるようにさせたものは何だったのであろうか。

このパスボールの取り組みは、ボール運動の教材分析をしたうえで子どもたちの発達の特徴に応じて取り組まれたところに大きな特徴がある。子どもたちに考えさせることを基本とした指導であり、子どもたちの認識を引きだそうとした実践であると言える。

その前提となったのが、ボール運動の教材分析と幼児期の発達の特徴との関連である。

ボール運動の教材分析により、ボール運動のおもしろさをボール運動の最終目標である「ゴール（シュート）」

であるとし、さらに攻防入り乱れ型のボール運動においてそのおもしろさを子どもたちがわかり・できるためには、個人のボール操作能力が2人以上のコンビネーションや全体のチームフォーメーションのなかで発揮されなければならない、それらが上達するためには空間（スペース）や時間（タイミング）を有効利用できるかどうかにかかっているとされている。そして、それらを可能にするための基礎技術を「2人のコンビネーションによるパスからのシュート」であるとし、この内容は取り組みの最初の段階から最後の段階まで質的に発展していき、おもしろさを味わうためには誰もが習得しなければならない技術と位置づけ、主要な取り組み内容として実践を展開している。さらに、技術指導の系統性を、ボール操作、コンビネーションの発展、コンビネーションの多様性、コンビネーションの複雑性、と捉え取り組み内容を構造化している。

「2人のコンビネーションによるパスからのシュート」の取り組みをゲームの前に取りいれはじめてから、その内容を、Bの役割を保育士がする、Bの役割も子どもがする、守りを1人いれての取り組み、と変化させていくごとに子どもたちの動きはコンビネーションが発展し、初歩的ではあるが多様化し、複雑化しているチームの動きがゲームのなかにも出現しはじめている。その典型的な場面が、それまではどのように動けばいいのかがよくわからなかったJ児・K児・A児3人のプレーである。

この基礎技術である「2人のコンビネーションによるパスからのシュート」が、前述した段階を経てできるようになるためには、三角形をいかにつくりだすか、言い換えればこの三角形の関係を認識することができるかにかかっていると見える。そのために子どもたちにわからせなければならないのは、図2におけるAの役割では、敵の位置に応じてBにパスを出すタイミング、パスを出してから敵の位置とあいている空間の判断に応じた走りこみ方、さらにBの役割では、Aが走りこんでくるスピードと走りこんでくる空間の予測・判断と敵の位置に応じてパスを出すタイミング、となる。そして、その一連の流れを可能にするのが、動きながらの個人のボール操作能力の高まりである。

つまり、人（味方・敵）やモノ（ボール）の動きを予測・判断する力が身につかなければ、攻防入り乱れ型のボール運動（「パスボール」）のおもしろさを子どもたち

にわからせることはできないと言え、言い換えれば「2人のコンビネーションによるパスからのシュート」ができるためには時間認識・空間認識・他者認識をわからせる必要があると言える。それらがわかることによって、「今ボールは味方が持っている。どこに動くのが自分や味方にとって有利になり、ボールをもらえるか。さらに、今自分が持っているボールはパスすべきかシュートすべきか。あるいは、今ボールは敵が持っている。どこに動けば敵の攻撃を防げるか、ボールを奪い返せるか」などの予測・判断とそれに応じた動きが駆使され、攻防入り乱れ型のボール運動の攻防が展開できるようになるのである。

最後に、5歳児の子どもたちの発達的特徴およびこの実践の内容を踏まえれば、攻防入り乱れ型のボール運動の人数は3人对3人が適切であると言えよう。

#### 謝辞

このパスボールの実践を展開した、T市N保育園の早川文子先生ならびに30人の子どもたちに深謝する。

#### 注

- 1) パスボールは、愛知県名古屋市内にある名東保育園において保育士と5歳児クラスの子どもたちにより1986年度に考案されたボールゲームである。(1)ボールの取りあいになったら審判（保育士）が10数える。それでも取りあいが続いているら審判ボールとし、審判が目をつぶり空中に投げあげて再開する。(2)コート外にボールがでたら最後にボールに触れた子どもの相手チームのボールになり、ボールがでたライン上からコートに投げ入れて再開する。(3)得点後は得点されたチームのボールになり、ゴール前から投げ入れて再開する、という3つのルールが作りだされ、それらのルールを守りながら3人对3人でコート内を自由に走り、パスをしあいながら相手のゴール（ベニヤ板、横80cm×縦90cm）にボールをぶつけて得点しあうものである。その後、1989年度の同園の取り組みにおいては、ゴールが子どもたちがダンボールでつくった鬼に変化している。
- 2) ボール運動の分類の変遷をみると、平成10年改訂の小学校学習指導要領において、具体的な種目名から「ベースボール型ゲーム」、「バレーボール型ゲーム」、「サッカー型ゲーム」、「バスケットボール型ゲーム」と改訂。さらに、平成20年の改訂では「ベースボール型」、「ネット型」、「ゴール型」となり現在に至っている。
- 3) 基礎技術とは、「(1)学習しようとする運動文化の本質（特質）を形成している最少単位の技術、(2)最初に練習し最後まで質的に発展する内容を持った技術、(3)学習する運動文化の技術習得については、誰もが必ず体験し、習得しなければならない技術、(4)ある程度の運動量を有し、児童生徒

が興味をもって容易に習得できる技術<sup>13)</sup>」と規定されている。

- 4) 「幼児期の発達の特徴」の項の認識の発達に関わる内容以降については、拙著「認識をひきだす保育実践を」『たのしい体育・スポーツ』No. 264, 2012年, 38頁 - 39頁を加筆・修正したものである。

引用文献

- 1) 拙著「幼児体育における教科内容と教材の関係 『ラグビーパスボール』の実践分析から」『日本福祉大学社会福祉論集』第114号, 2006年, 75頁 - 76頁.
- 2) 同上, 76頁.
- 3) 拙著「幼児体育における『わかる』と『できる』の関係 『マット運動』の実践分析から」『日本福祉大学社会福祉論集』第116号, 2007年, 20頁.
- 4) 森敏生「ボール運動(球技)の特質と技術指導の系統性をどう考えるか」『たのしい体育・スポーツ』No. 182, 2005年, 6頁.
- 5) 同上.
- 6) 学校体育研究同志会編『小学校ボール運動の指導』ベースボール・マガジン社, 1973年, 20頁.
- 7) 森敏生, 前掲書, 7頁.
- 8) 同上.
- 9) 石田智巳「ボール運動の授業の難しさと私たちの指導 『上手い, 下手』関係の組織を中心として」『たのしい体育・スポーツ』No. 206, 2007年, 31頁.
- 10) 堀江重信『からだづくり・けんこうづくり』ミネルヴァ書房, 1985年, 210頁.
- 11) 中村敏雄「幼児体育における教材づくりの観点」『体育科教育』19巻12号, 1971年, 15頁.
- 12) 五十嵐顕他編『岩波教育小辞典』岩波書店, 1982年, 214頁.
- 13) 荒木豊「運動文化の基礎技術と技術学習の系統性」『山梨大学教育学部研究報告』第18号, 1968年, 293頁 - 295頁.